

# 松下幸之助と高神覺昇の思想——西田幾多郎の哲学と共に

坂本慎一

## 序

松下幸之助は、昭和一六（一九四一）年三月二五日の朝、高神覺昇の講話をラジオで聞いて感銘を受け、同日、社員の前で高神の思想を絶賛したことがあった。高神は友松圓諦と共に全日本真理運動を展開した学僧である。筆者は以前、友松と幸之助の思想の連関を論じたことがあったが、<sup>1)</sup>高神は考察の対象外としていた。本稿では、高神を中心に取りあげたい。

高神は西田幾多郎の弟子であった。従来、西田哲学と幸之助の理念の類似性は一部で指摘されており、この仮説は十分に取りあげるに価するものと判断できる。本稿では、幸之助研究から見て、西田の思想のどの部分が重要であるのかを考察する。

また、高神は「正しき人間観」を主張した。これは幸之助の「新しい人間観」と非常によく似ている。ここでは、何が共通して何が異なるのか、両者の比較を試みた。最後に、西田哲学がかかえる問題を手がかりに、幸之助の「素直な心」に内在する矛盾について解釈を試み

る。

本稿では、西田、高神、幸之助の理念についてさまざまな観点から論じ、幸之助の「新しい人間観」や「素直な心」に関する考察を深める一助としたい。

## I 高神覺昇を激賞

### 1 高神覺昇のラジオ放送

松下幸之助は、昭和一六（一九四一）年三月二五日火曜日、社員の前で次のような話をした。

けさラジオの修養講話で、「孝行」についてまことに結構な話を拝聴し、いまさらながら感銘を深くしたのである。

孝行ということについては、われわれ子どもときから行住<sup>ぎょうじゅう</sup>坐臥<sup>ざが</sup>に教えられてきたのであるがなかなかいたりたく、ことに早く両親に先だたれた自分などは、顧みてただただ不徳を悔いるのみである。

「孝は百行のもと」と古人の教え実にそのごとく、孝の道は単に父母への仕えにとどまらず、すべての環境に対し誤りなき生活の基準となるもので、孝心の厚い人は、どこでどんな仕事に携わってもおそらく間違いない人であり、必ず立身出世のできる人である。

けさこの講話を聞くにつけ、わけて本春入社<sup>①</sup>の諸君に申しあげたい。多年その温かい膝下<sup>②</sup>ではぐくみ育てた諸君を、初めて遠く実社会に送った諸君の親たちは、雨につけ風につけ、どんなに諸君の上を思い案じておられるだろう。松下電器とははたしてどんな会社か、上役先輩はよい人であろうか等々、いろいろと心配しておられることと考える。

されば諸君は、怠らずにたびたび親もとへ通信して、少しでも安心していただくよう心がけてもらいたい。もちろん会社からも諸君の入社後の動静についてはよく報告申しあげさせるつもりである。

けさの講話を拝聴して、心打たれたものあり、この感激を諸君に分かち、反省して日々に処していききたいと痛感して、お話し申しあげる次第である。

幸之助はこの日のラジオ講話について、「感銘を深くした」「心打たれた」「感激」と強い調子で激賞している。この幸之助の話は何人くらの社員が直接聞いたのか、またこの日の何時ごろに語ったのか、特に記録には残っていない。

幸之助が聞いた放送は、大阪中央放送局（JOBK）の番組だったはずである。この日朝の教養番組は、都市放送（第二放送）で「支那語講座」（放送時間不明）があり、七時三〇分から全国放送（第一放送）で高神覚昇による「父母恩重経」があった。高神の放送は人気番組「朝の修養」の出演であり、放送内容から考えても、幸之助が述べている「ラジオの修養講話」は、高神の放送と考えると間違いないと思われる。

高神の放送は、その反響を受けて年内に講談社から筆記録が出版された。出版された文章は放送後に加筆修正してあるので、放送内容とまったく同じではないようだが、三月二五日の放送に該当すると思われるのは次の部分である。

いったい世間には子供のない人はある。だが、親のない人間、親をもたぬ人は、ひとりもない。それなのに、世の中には、自分でひとりで生れ、ひとりで育ち、ひとりで大きくなったと思ってる人間が随分ある。しかし、それこそ文字通り認識不足である。私どもは断じてひとりで生れたのではない。ひとりで育ったのではない。ひとりで大きくなったのではない。みんな両親のおかげで生れたのである。親のおかげで育ったのである。つまり、生れたのではなくて、生んでもらったのである。大きくなったのではなくて、大きくしてもらったのである。

まことに親となり、子となること、みなこれ他生の縁である。

まったく不思議な因縁で親となり子となったのである。この広い世間に、大勢の人間のうちで、たった一人の父、たった一人の母をもって、この世に生れ出たことは、なんといっても不思議な因縁だといはねばならない。しかも、他の国に生れずして、神の国といはれ、仏の国といはれるこの日本に、生を受けたといふことは、どう考へても有難い因縁だといはねばならない。本当に、

「父にあらざれば生れず、母にあらざれば育たず」

である。両親のお蔭でこの日本に、とりわけ「み民われ」陛下の赤子として、栄えゆく現代の日本に生れ合せたといふことは、たとひ自分の境遇がどうあらうとも、心からまづ何を措いても双親の御恩を感謝すべきである。しかもこの親の御恩が真にわかつてこそ、始めて皇室の渥き御恩も自然にわかつて来るのである。げに、忠臣は必ず孝子の門に出るのである。忠誠の士は必ず純情の孝子である。忠と孝とは二にして一である。忠孝一本、そこにわが国柄の尊さがある。

「父母恩重經」の放送は三月二四日から三日間行なわれ、高神によれば、初日は東京から、後の二日は大阪から放送したとのことである。

また、この日高神は「父母恩重經」の一節を最初に紹介したが、そのなかに「行住坐臥」の語があった。先の引用にもあった通り、幸之助はラジオで聞いたこの言葉をその日の内に社員の前で使っていた。

## 2 当時の事実関係

昭和一五（一九四〇）年度における大阪府の世帯別ラジオ聴取契約加入率は五八・四％であった。高神が出演した『朝の修養』の昭和一五～六年における大阪市の平均聴取率は、四二・八％であった。このころの『朝の修養』は、大阪市では単純計算で約二五％（ $0.584 \times 0.428 = 0.249952$ ）の世帯が聴取していたことになる。

また昭和一五年一～二月にかけて、日本放送協会はどのような出演者に興味を持っているか聴取者にアンケートを取った。高神は加藤咄堂と共に四位にランクされている。ラジオ放送界全体においても、高神の人気は非常に高かったと考えてよい。

四二・八％という聴取率は、『朝の修養』の平均聴取率なので、人気のある人が出演すれば、聴取率はさらに大きく上がる傾向にあった。幸之助が激賞した二日目の放送は、初日に聞き逃した人が評判を聞いて聴取した可能性もある。高神による三月二五日の放送の聴取率は、五〇％を優に超えていたと想像される。

大阪府におけるラジオ聴取契約加入率は、農村部も含めた数字なので、都市部ではさらに高い数字だったと思われる。またこの当時、松下電器は日本屈指のラジオメーカーであり、社員における聴取契約加入率は、大阪府の平均を大きく上回っていたと考えてよいであろう。

高神の人気や松下電器社員におけるラジオ聴取契約加入率を加味すると、恐らく多くの社員が三月二五日の放送を聞いていたのではないか。幸之助は「けさラジオの修養講話」としか述べておらず、番組名も出演者の名前も明言しなかったが、多くの社員がその日の朝に同じ

放送を聞いていたとすると、それは言うまでもないことだったと想像できる。「いまさらながら感銘を深くした」とは、親孝行の大切さを「いまさらながら」教えられたとも受け取れるし、有名な高神の話に「いまさらながら感銘を深くした」という意味にも解釈できる。

『朝の修養』は、戦前のラジオにおける有数の人気番組であり、前身は『聖典講義』という番組であった。『聖典講義』は昭和九（一九三四）年三月から、友松圓諦の出演によって始まった。友松は三月一日から一七日まで日曜を除く毎朝午前八時から三〇分「法句経講義」を放送した。この放送は絶大な反響を呼び、東京ローカル放送であった『聖典講義』は、四月には全国放送になった。高神はこの『聖典講義』に、四月三〇日から五月一二日まで出演し、「般若心経講義」を放送した。これも大きな反響を呼び、友松と高神が中心となって、新時代の仏教的理念を確立・普及させようと真理運動を開始したのである。

『聖典講義』は昭和一〇（一九三五）年二月一日から『朝の修養』と改題され、時間も朝七時（冬期は七時三〇分）からの二〇分番組となった。昭和一五年から翌年にかけて日本放送協会が調査した聴取率によると、『朝の修養』は東京市で四七・九％、大阪市で四二・八％であった。当時の多くの人が、朝にこの番組を聞いてから出勤するという生活スタイルを取っていたと考えてよい。

高神を絶賛した当時から、幸之助は松下電器においてカリスマ的な社長であった。彼がここまで高神を賞讃したとすれば、当然のことながら、松下電器社内における高神の関心は高まったと推測できる。当

時一万人に垂んとしていた松下電器社員のなかには、高神の思想をより積極的に学ぼうとした人もいたであろう。

## II 西田哲学と松下幸之助

### 1 高神覚昇と西田幾多郎

高神覚昇は真理運動の副代表格であったと同時に、西田哲学の継承者という一面もある。高神は、大谷大学で西田幾多郎に師事し、西田の影響を受けた思想家であった。西田も高神のことは評価しており、大正一一（一九二二）年に高神が『価値生活の体験』を出版した際、西田は次のような序文を書いている。

今の私立大学智山勸学院ができてから、高神君は第一回の卒業生の一人であった。君は勸学院を出られてから、奈良に、大谷大学に、仏典を学ばれ、今は母校に於て教鞭を執って居られる。君は真言宗という如き古き歴史ある宗教の中に育ちながら、新らしい哲学に興味を有せられ、かかる立場から書かれたものが此書であると思う。我国が承け伝えた印度や支那の聖典は恰も近代式精錬を加えない鉱物の如きものである。之を近代式に精錬することによって、我々は昆崙の鍬から精鋭なる大砲と軍艦とを造り得るのである。固より此種の事は容易ではない。軽々に之を企てれば、却って企てざるに劣ることもあるであろう。然れども雲なくして雨の降らんことを望むは難く、草なくして大樹の発生を期するこ

とはできない。余は古典的宗教たる真言宗の中から、高神君の如き人の出ざるを悦び、又同君の為に更に深い研究の途に進まれんことを望むのである。<sup>12</sup>

インドや中国から学んだ知性に欧米流の「近代的精鍊」を加えるという試みは、西田自身の立場をも表している。

さらに高神は西田の弟子である野崎広義にも師事した。まず西田は野崎について次のように述べている。

私が京大哲学科の講壇に立つ廿年の間に、多大の期待を負ひながら、業を卒へて間もなく歿去した三人の秀才があった。始めは野崎広義、次には岡本春彦、次には三土興三である。特に野崎広義君は四高からの関係もあって、最も私に親炙してゐた。<sup>13</sup>

別なところで西田は「野崎君の死は余に取っては自己のいくらかが奪ひ去られたやうに思はれ、言ひあらはずことのできない一種の寂しさを感じざるを得ない」と述べており、二十代で亡くなった野崎に大きな期待をかけていたことがうかがえる。

この野崎について、高神は次のように述べている。

故人と自分との関係は師弟の間柄である。故人は自分にとって先生なのである。否、単なる世間に云うが如き先生ではなくて、自分にとっては寧ろ、同情のある畏友といった方が適わしいかも

知れない。自分が先生と初めて相識したのは今より三年以前、即ち大正三年の九月智山大学の教室にて初めて先生の講義を聴いたのである。その時は先生が大阪朝日新聞社を辞せられた時で、教壇の人としての先生の生活は正しく、この時が最初であった様に聞いて居る。……特に自分等の強くインスパイアされたのは大正五年三月、自分等にとっては最後の時間であった。その時先生は

哲学史の本質を論じ、古今の哲学者を批判し去つて、遂にカントよりヘーゲルに及び、哲学の最後の結論として、「俺は俺だ」との自覚にありとし、其の哲学の本領はこの単なる一語に在り、と語られた事は今も尚深く自分の頭の中に刻銘せられて居る。

爾来、自分は、学校を卒えた後も、時々先生の指導を待つて少なからずアフエクトされた。自分が現在多少なりとも哲学研究に興味を感じ、自分をしてphilosophieren(＝哲学する)の世界に導いてくださった事は全く先生の賜であると深く感謝して居る。<sup>14</sup>

高神は野崎から強い影響を受けていたのであった。西田との関係を考えれば、高神は西田の直弟子であったと共に、孫弟子でもあったと判断できる。西田の哲学は「禅の哲学化」とも呼ばれ、仏教的知性を西洋哲学のロジックで論じたものとされているが、高神にも仏教的知性と西洋哲学のロジックの両方を見ることができるといえる。

## 2 ワーゴ仮説

筆者の知りうる限り、松下幸之助の理念に十分な理解を持った上で、

他の日本の思想家との類似性を指摘する仮説は、ロバート・ワーズによる「松下幸之助の合理的・人間主義的経営」だけである。ワーズは、幸之助の思想と西田幾多郎の哲学の類似性について、次のように論じている。

偶然といえば偶然だが、私が西田哲学を学んでいたことは、松下幸之助という経営者を理解し論じる上で、たいへん貴重な役に立つ経験であったと思う。

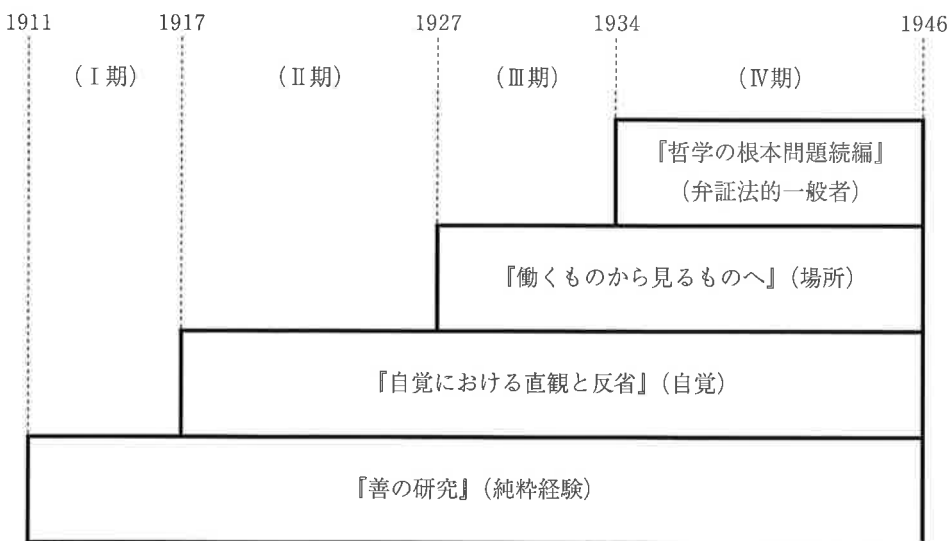
主観と客観と、どちらが真実か、どちらがどちらに従属するか、というよりも主客が分かれる前の状況と分かれてからの関係をはつきりさせようとする西田のテーマは、経験による統一作用によってありのままの姿に近づいていくという点で、松下の思考に大変よく似ている。西田の「純粹経験」と松下の「素直な心」は似ている様相がある。<sup>16)</sup>

すでに述べたように、幸之助は西田の強い影響を受けた高神覚界を激賞していた。高神を経由して幸之助が西田の思想を部分的に摂取した可能性は十分に考えられる。<sup>17)</sup>

また、終戦直後に刊行された最初期『PHP』誌には、天野貞祐、下村寅太郎、高坂正顕など多くの京都学派の執筆者を見ることができ<sup>18)</sup>る。幸之助の思想と西田哲学に一定の類似性が認められるというワーズの指摘は、非常に興味深い。

西田の哲学は、年代によってその思想が変化して行つた。上山春平

図1 西田哲学の時代区分



上山春平「絶対無の探求」(日本の名著47『西田幾多郎』中央公論社、1984年)67頁より改稿作成

の区分によれば、図1のような四期に分けることができるという。その変化は、別な思想に変わって行ったと言うよりも、基本的にはより重厚になって行ったと言える。

幸之助への影響は高神を経由している面が大きいはずであるから、後期の西田はそれほど重要ではない可能性が高い。西田自身は、初期の著作である『善の研究』について、「今日から見れば、此書の立場は意識の立場であり、心理主義的とも考へられるであらう。然非難せられても致方はない。併し此書を書いた時代に於ても、私の考の奥底に潜むものは単にそれだけのものでなかったと思ふ」としている。初期の思想はある種の心理主義的傾向が強く、またそれでいて、心理に留まらない世界も論じていたのである。

一方、幸之助の「素直な心」も「心」について述べていることから心理主義的観点があるが、同時に心理の問題を超えている。例えば「素直な心の効用」として、「日に新た」「適材適所の実現」「病気が少なくなる」などをあげており、明らかに心の問題に留まっていない。『善の研究』で分析された「純粹経験」と、幸之助が述べる「素直な心」は、共に心理を中心に論じつつも、それを超越している点で共通している。

西田の思想は年代を経るに従って現象学や人間存在基礎論としての性格を強め、初期にあつた心理主義的傾向は弱まった。また後期になるに従って西洋哲学的な色彩を強め、理論の完成度が高まると同時に、アカデミクな哲学者しか興味を持たない内容になっていった。『善の研究』は未完成であるがゆえに応用の可能性も有しており、実業家

や芸術家のように、大学の哲学研究者ではない人も影響を受けたのではないだろうか。それは高神が野崎から「インスパイアされた（＝靈感を与えられた）」と述べたように、概念装置や分析道具を借りてくるといふものではなく、発想の基やモチーフとなるような影響の受け方ではなかったか。社会的に見た西田哲学の重要性もまた、人々にそうした「靈感」を与えるところにあつたと考えられる。

また西田の哲学が広く受け入れられたことについて、従来はその理論が時代に合っていたとするなど、その内容を指摘するものが多かった。しかし、一般的に言つて、ある理論が優れているからといってすぐに広まるわけではなく、まして哲学ともなると普及のスピードは他の学問分野に比べて遅いのが当然であろう。西田哲学が哲学者以外にも広く受け入れられた要因として、高神のラジオ出演も考慮するべきではないか。ラジオ出演者の人気投票で高神が四位にランクインしたことから考えても、高神が西田哲学のエッセンスをラジオで大衆に広めた可能性は高いと思われる。さらに全国へ展開した真理運動を通じ、その副代表格の高神が西田哲学も普及させた可能性がある。いわゆる「京都学派」のなかに高神が含まれている例は見出せないが、大衆への普及を考えると、高神の存在は非常に大きいのではないか。

### 3 西田幾多郎と高神・幸之助の比較

西田はその著書において、最初からキリスト教の「神」と仏教の「仏」に該当するものが、ほぼ同一であるという前提で議論をしている。初期の著作である『善の研究』ですでに、この考えは何の論証も

なく、当然の事実のように扱われている。

また、西田が仏教や仏教から影響を受けたと思われる思想を論じる際、その仏教は現世的な仏教であることも特徴である。「純粹経験」は生きた人間の経験であって、死後の人間の経験ではない。「絶対矛盾的自己同一」も「弁証法的 一般者」も、あくまで現に生きている人間について論じているのであって、「死後の自己」や、「あの世における一般者」は特に問題になっていない様子である。

西田の思想が明治時代に育まれたことを考えると、この発想は当時としてはかなり新しい考えであったと見るべきである。新仏教運動を推進した高嶋米峰は、仏教とキリスト教の根本は同じだと主張し、現世的な生きるための仏教を主張した。そのために旧仏教側から激しい攻撃を受け「悪魔の如く恐れられ、外道の如く嫌はれた」と証言している。

そもそもキリスト教の本質な部分と仏教の根本が同一であるという発想は、近代日本においては新仏教が最初に提唱したものであった。この発想は、他の宗教を積極的に攻撃していた当時のキリスト教からも考えにくいものである。

西田が当然の前提としているこの二つの論理は、新仏教運動が旧仏教勢力と戦って勝ち得た思想であり、彼らの運動の成果であった。西田が新仏教徒同志会メンバーだった鈴木大拙と若いころから懇意にしていたことを考えても、西田は新仏教の思想の影響下にあったと考えられよう。

高神らによる真理運動は高嶋らの新仏教運動を昭和初期において引

き継いだものであった。幸之助によるPHD運動もこれらの系譜上に位置づけることができる。高神や幸之助の思想が新仏教の後裔であるとすれば、新仏教の成果を前提としている西田の哲学は、一定の類似性が見られて当然である。

また、高嶋、友松、高神らのラジオ出演は、昭和初期において宗派を超えた仏教復興ブームを起こした。このブームによって、西田の哲学が広く読まれるようになった可能性も十分に考えられる。西田の哲学は西洋哲学に比べれば明らかに仏教的色彩が強く、それでいて旧来の仏教とは大きく異なる新しい面も持っている。仏教復興ブームによって、近代的な仏教の考え方に慣れた人達が、西田の思想に接近していったこともあったのではないか。

しかし西田の哲学と、高神や幸之助の理念との決定的な違いは、前者が直接的に社会運動になったわけではないのに対し、後者二人の理念は社会運動の理念そのものであったことである。西田の哲学は社会に大きな影響を与えつつも、社会運動とのつながりはあくまで間接的である。田辺元も、西田の哲学について「積極的に之を体系の根柢とするに及び、現実と隔離した静観諦視を将来する恐がりはしないか」と批判した<sup>24</sup>。この点に関して言えば、西田は新仏教運動よりも清沢満之らの精神主義に近い。精神主義は新仏教に比べて理論的に洗練されているが、運動性はずっと低く、社会改良的思考を強く持つものではない<sup>25</sup>。

また、西田と二人の相違点として、西洋への対処の方法をあげるこ  
とができる。高神の書の序文に書いた通り、西田が目指したのは、



インドや中国から学んだ知性に欧米流の「近代的精鍊」を加えることであった。インドや中国の知性は鉄であり、これから大砲や軍艦などの有用なものをつくるのが西田の目標であった。

一方、高神は次のように言っている。

日本人が日本人としての意識をもつ以上、此の（Ⅱ近代の）間の消息を深く考へてみなければならぬ。上に万世一系の皇室を戴いて、悠久三千年伝統的に共同社会を作つてゐるのは、世界広しと雖も、日本人だけである。しかも外国の文明を取り入れて、採長補短、常に生々として、日に新にして、また日に新たなところ、ここに日本の特色がある。……しかるに明治維新以来、西洋の個人主義、経済主義が輸入された結果、日本人がすっかり外国人の心になつてしまつた。昔公は和魂漢才といはれたが、現代の日本人は洋魂洋才になつてしまつた。<sup>26</sup>

高神は、日本人が日本の伝統を失いつつあることに危機感を持っていたのであつた。真理運動による仏教理念の普及も、こうした危機感に基づいたものであつたと考えられよう。

幸之助は、次のように述べている。

概していえば、今日、日本人は……日本の伝統精神というものを見失いつつあるのではないか、伝統の精神が日本人の間からうすれつつあるのではないかという感じがします。日本の歴史、伝

統を尊び、そこに一切の基礎を置いて物事を行なうといふのでなく、むしろそれを軽視したり、あるいは否定するようなものも考へ方も一部にはみられるように思います。そして、そういうところに、今日の社会におけるもろもろの混乱、混迷が生じてきた大きな原因があるのではないかという気がするのです。

そうした姿は、いわば伝統精神の喪失ともいふべきものかもしれません。そしてそれは、終戦以来今日までの三十有余年間に、次第しだいに失われてきたのではないかと思ひます。<sup>27</sup>

幸之助の主張は戦後のものなので、高神と同じ時代について論じているわけではない。高神は昭和初期の時代状況を論じており、幸之助は昭和五〇年代を分析している。しかし、日本の伝統が失われつつあるという点では、両者の危機感は共通である。

こうした危機感は西田にもあつたのかも知れない。しかし西田が取つた方法は、あくまで西洋的なロジックで自らの哲学を開陳することであつた。高神と幸之助は、西田が鉄に譬えた東洋の知性が弱体化していると感じていた。西田は鉄の「近代的精鍊」にこだわつたが、高神や幸之助は、そもそも鉄が失われつつあると主張した。西田の姿勢が日本の「西洋化」にあつたとすれば、高神や幸之助は日本の「再日本化」「再東洋化」とも言うべきことが必要であると認識していたのであつた。

### III 高神覚昇と松下幸之助の人間観

#### 1 高神覚昇による人間観と人間道

高神覚昇が生涯にわたって求めた思想に「正しき人間観」があった。<sup>28)</sup>高神は従来の思想家による人間観を三つに分類している。一つは「未自覚の状態」であり、人間を単なる自然的存在として肉体を中心に観る姿勢である。二つ目は「個人的自覚状態」であり、人間を単に思维的存在として精神を中心に観る姿勢である。三つ目は人間を「全体的に具体的に歴史的に社会的に」観る人間観である。第三の立場を高神は「仏教的人間観」と述べ、「正しき人間観」としている。

哲学史に明らかった高神は、古代ギリシャや古代インドの人間観を分析し、これらと日本古来の人間観を比較した。高神は次のように述べている。

日本における人間観の特徴は、人間を単なる地上における動物とは見ずして、天地間に存在する唯一絶対の尊き存在として見ることである。即ち古代日本では人は万物の霊長なることを如実に肯定したものと見える。従って日本における「神」の概念は、西洋思想における神の概念とは非常に相違しているのであって、つまり神と人とは同意語で、「神は人の尊尚の義」(古史通)であり、「人の中にて殊に勝れて上なる人が神」(古史伝)である。故に日本の人間観が希臘や印度以上に人間中心であること、別言せば

むしろ人間崇拜 (Anthropolatric) の著しきものであることは、われらの特に注意すべきことで、私は大乘仏教における仏陀観、人間観と比較し対照することによつて、そこに異常な興味を感じるものである。<sup>29)</sup>

ここで言う「異常な興味」とは、日本古来の人間観と、大乘仏教の人間観が期せずして一致しているという意味のようである。高神が考える「正しき人間観」とは、人間を「万物の霊長」と認め、神と人を「同意語」と認める見解であった。人間崇拜と言えるほどに人間中心的な人間観は、古代からある日本の考えであると同時に大乘仏教の考えとも似ていて、「正しき人間観」なのである。この考えは「人間は万物の王者」と主張する幸之助の思想と非常によく似ている。

人間に関する問いが問題となる際、多くの場合は人間ではない存在が同時に問題となる。人間とは何かを問うのなら、人間ではないものとは何かを問わなければならない。西洋の思想において人間ではないものは、神であった。人間とは何かと問う場合、人間との対比として、神とはどのような存在なのかが同時に議論されたのであった。

高神の人間観において、問題になるのは仏である。人間ならざる存在としての仏が問題になっている。これが西洋の神と決定的に異なるのは、西洋の神と人間は完全に峻別され、人間は神になれないのに対し、仏教では人間が仏になりうることである。仏になるとは、「成仏」することである。人間とは何かという問いかけは、仏ならざる人間がどのようにして仏になるのか、あるいはどのようにして仏になるべき

なのかという問いと同時に発せられるのである。つまり「正しき人間観」は、「正しき成仏観」と共に論じられるのである。

「成仏」について、高神は次のように説明する。

「仏になる」という人間最高の理想も、畢竟人間道の完成を描いて他にある筈はない。「人になる」ということは、やがて「仏になる」ということであり、「仏になった」ということは、「人になった」ということである。所詮人間の道を履み行わずして、仏の道を成就せんとするが如きは、全く文字通り木に縁りて魚を求むるに等しい。若しも仏道の体験が、人間道の外にあるものならば、それはわれらにとりて永遠に不可能なことであろう。人間生活を否定することによりてのみ、仏陀の生活は可能なりというならば、わが仏教は非人間の宗教であって、人間の宗教ではない。仏教があくまで人間の宗教である以上、人間道の完成こそ、やがてそのまま成仏の天地でなければならぬ。<sup>31)</sup>

高神が言う「仏陀の生活」は、別の表現で言えば、悟りを開くことである。高神は、「解脱」「成仏」「悟り」「涅槃」をほぼ同義語に使っている。悟りを開くということは、友松が好んだ表現で言えば「すなおな心」になることである。つまり、高神が求めた「正しき人間観」とは、「正しき素直観」のことである。人々は真に「素直な心」になることによって「成仏」し、人間を超越した仏になることができる。人間をこのような存在ととらえ、人間の歩むべき道として「人間道」

が提唱されるのである。高神の最終目標は、世の人全員が人間道を完成して「成仏」すること、つまり「素直な心」になることであつたと言つてよい。

## 2 松下幸之助の「新しい人間観」との比較

松下幸之助は「素直な心」になることを重視し、これを「仏教の悟り」と説明した。「素直な心」は、友松や高神の言う「すなおな心」<sup>32)</sup>と「成仏」「解脱」「涅槃」とほぼ同じことを論じていると考えられる。

しかし、幸之助の場合、「素直な心」の位置づけは高神と異なるようである。幸之助は次のように言っている。

人間が個々に知恵を磨き、衆知を集めていくための手段とか方法については、多種多様なものがあると思います。しかし、その基本の心がまあとして大事なものは、……素直な心というものです。これなくしては真に知恵を高めることも衆知を集めることもできないでしょう。<sup>33)</sup>

幸之助の場合、「素直な心」は「手段」や「方法」である。それはあくまで衆知を集めるための方策である。衆知を集めたその先にある最終目標は「物心ともにゆたかな調和ある繁栄、平和、幸福を逐次実現させていく」ことである。また、「繁栄の原理を究め 進んでこれを社会生活の上に具現し 以て人類の平和と幸福とを招来せん」という表現から、繁栄も時に手段や通過点と位置づけられ、平和と幸福が最

終目標になっていると解釈することもできる。

高神の場合、「素直な心」が最終目標であるから、極端な状態を考えるならば、社会が平和ではなく、人々が幸福ではなくても、みな「素直な心」になっていけば、目標は達成されていることになる。一方、幸之助の場合、「素直な心」は手段や方法であるから、みな「素直な心」になっていなくても、平和と幸福が実現されていれば、それで目標は達成されたことになる。幸之助の場合は、「素直な心」を手段としなくても、別な手段や方法で平和や幸福が実現できるようになれば、それでも目標達成となる。

もっともこれは言葉尻をとらえた解釈であり、両者は説明の方法や表現が異なっているだけで、ほぼ同じことを主張していたと解釈することも可能である。高神においては、人々が「素直な心」になり、「成仏」していれば、同時に平和や幸福が実現されると考えていたのではないか。幸之助においても、人々が「素直な心」ではないのに、平和や幸福が実現できるとは考えていなかったはずである。両者は、同じ目標を異なる角度から説明したとも言える。

また、両者は「正しき人間観」と「新しい人間観」をそれぞれ主張した。高神は「正しき」と言うが、正しいものをどのように求めて行くかについて、フリードリッヒ・ヘーゲルの止揚(aufheben)を重視する。対立する考えや思想も止揚されることによって「その思想は新しく高められ揚げられて」行くのである。止揚について、次のように説明している。

甲と乙の争論に就てみるに、もしもそれがあくまで両者の否定に終始するならば、その争論は永久に止まないであらう。しかしそれが止揚であった場合は、争論は消えて和解が生ずる。和解はいうまでもなく両者お互いの理解であつて、甲の方は新らしく乙の考えを取り入れ、乙の方はまた新らしく甲の考えをとり入れ、すなわち甲乙互に新らしく第三の世界において、対立の世界ではなく、統一の世界において手を握るのである。それは否定ではなくて肯定である。<sup>37)</sup>

高神によれば、これは大乘仏教の「相成」の思想と同じである。大乘仏教が止揚の哲学であるということについて、次のように述べている。

絶対空の世界においては、少くとも空と有とは相破でなくて、相成である。……換言せばいわゆる有にもあらず、また空にもあらざるものと共に、有にして空、空にして有ということができる。<sup>38)</sup>

このようにあらゆる対立は「相成」され、新たに正しいものとなって行くというのが高神のとらえ方である。高神が言う「正しき人間観」も、こうした「相成」を繰り返すことで求められて行くのである。

一方、幸之助の「新しい人間観」は、「新しい」に注目する必要がある。この「新しい」は当然のことながら、今までに存在しなかった

というだけではない。それは「新しくて良い」ものであり、「新しくて悪い」ものを意味していない。この「新しくて良い」ものを求めて行くために、幸之助は衆知を集めることを重視した。幸之助は次のように述べる。

人間の偉大さは、個々の知恵、個々の力ではこれを十分に發揮することはできない。古今東西の先哲諸聖をはじめ幾多の人びとの知恵が、自由に、何のさまたげも受けずして高められつつ融合されていくとき、その時々々の総和の知恵は衆知となって天命を生かすのである。まさに衆知こそ、自然の理法をひろく共同生活の上に具現せしめ、人間の天命を發揮させる最大の力である。

幸之助の衆知は「幾多の人びと」から集められる。この意味では、二項対立的な高神の図式とやや異なる。高神は二つのものの対立と「相成」を重視し、幸之助は「幾多」のものから「新しくて良い」ものが生まれると考えている。高神の説明はやや機械論的で単純である。幸之助の方が三つ以上のものの「融合」を考えている点で、有機的であり、複雑である。

しかし、これは説明の便宜上の問題と考えることができ、本質的に大きく異なると言うよりは、説明の仕方が違うだけかも知れない。両者とも複数のものが、より高度な次元へ発展して行く過程を重視した点で共通しているとも考えられる。

両者のより本質的な相違点は、衆知と「素直な心」の連関である。

幸之助は次のように述べる。

これまでの歴史において、そのすぐれた本質を好ましい姿において發揮することができなかったのは、人間がその本質なりみずからの偉大さを、十分に自覚認識できなかったからであり、また衆知を集めるという点において、それなりの努力がなされながらも、なお欠けるものがあつたからなのです。だから人間が、みずからの本質を正しく知って、つとめて素直な心を養いつつ、利害得失や感情にとらわれることなく、衆知を集めていくならば、人間はその時々において自己のすぐれた本質を最大限に發揮することができるとは思います。

ここで幸之助は衆知を集める「努力」や、衆知を「集めていく」ことを述べている。衆知は人間の意志のないところで勝手に集まるものではなく、集めようとして集まるものである。先の引用では「何のさまたげも受けずして高められつつ融合されていく」と述べているので、人間の意志を超越した現象のようにも受け取れるが、恐らくこれは人間の所作を第三者的に見たような描写をしているだけと考えるべきであろう。基本的に衆知は勝手に集まるのではなく、人間が集めようとするものと考えていたのではないか。つまり、「新しくて良い」ものを得るためには、衆知を集めようとする人間の意志と、その意志に基づく行動が不可欠なのである。

これに対し、高神は例えば次のように言っている。

私どもは少くとも、宇宙は全体として一つの偉大なる精神的な実在によって統一されているものと思う。そしてその一つの靈格の發展というか、表現というか、つまり種々なる縁に随うて顕現したものが、私共の個々の自我であると思います。而してその精神的実在をば、古来真如とか法とか如来とか神とか梵とか呼んでいます。随って私どもの個々の自我は、この全体として統一される大我の相である。故に私どもの自我が宇宙の実在と本質的に一如であると自覚したる時、始めて私どもは真実の自我の如是相に面接したもので、これをウパニシャッドでいえば梵我一如の世界であり、仏教の言葉で以ていえば、所謂仏凡一体、凡即是仏の天地であります。<sup>(4)</sup>

宇宙は「精神的な実在」によって統一されていると高神は説く。つまり幸之助の言う「衆知」はすでに集まっているのである。この統一された精神こそ、神や仏と呼ばれるものであり、幸之助の言葉で言えば「宇宙根源の力」である。高神によれば、「宇宙根源の力」において衆知はすでに集まっている。しかし本来はすでに一つに集まっている精神が、個々人において「顕現」すると、内容はまちまちであり、時には相互に対立している。そこに対立を解消する「相成」が必要になつてくるのである。

また、幸之助は「素直な心」と「宇宙根源の力」の連関について、次のように述べている。

人間の智慧才覚を有効に完全に生かしきるためには、素直な心で宇宙の実相を眺め、人間の本质を見なければならぬのであります。素直な心になれば、宇宙の実相がありありとわかるようになり、根源の力が生き生きと働いて、精神文化と物質文化とはおのずから調和してまいります。そしてそこから繁榮、平和、幸福への道が開けてくるのであります。<sup>(4)</sup>

幸之助は、「素直な心」になれば、「根源の力」が生き生きと働くとしている。素直な心になるとその後「宇宙根源の力」との連関が生まれてくるのであって、「素直な心」になった時点では、必ずしも「宇宙根源の力」は関係ない。順序を言えば、まず「素直な心」になり、それから「宇宙根源の力」との関係が生まれてくるのである。<sup>(4)</sup>

高神によれば、衆知の集まった境地というものはすでに存在している。しかしわれわれは「素直な心」が足りないもので、その境地に到達できない。日々の労働という修行を通じて対立や矛盾を「相成」し、やがて衆知の集まった境地に達することができるならば、それは「素直な心」になったと解釈する。高神は、幸之助の言葉で言えば、「宇宙根源の力」と「一如」になれば「素直な心」になったと考えるのである。高神における「素直な心」は、「宇宙根源の力」と無関係には成立しない。順序を言えば、「素直な心」になると「宇宙根源の力」との関係が生まれてくるのは同時であって、前後するものではないのである。

さらに、決定的に両者が異なるのは繁栄についての考え方である。幸之助の場合、繁栄を通じなければ平和や幸福はありえず、素直な心になるのも繁栄を求めためであった。一方、高神は友松と真理運動を展開し、都市で働く経営者や労働者に、日々の勤労こそ仏教的な修行であると説いた。しかし高神において、近代資本主義や物質的繁栄は所与となっており、あつても良いが、なくても良いものであつた。物質的繁栄を求める仕事を通じて「素直な心」になつて行くことは大切であるが、他の方法で「素直な心」になつても良いのである。繁栄がそこになかつたとしても、みな「素直な心」になつた時点で、高神の場合は最終目標が達成されたことになるのである。

幸之助が高神から影響を受けたとするならば、高神の思想のなかに繁栄が組み込まれていないことに幸之助は不満を感じたはずである。では、高神の体系のなかに繁栄を組み込むことが簡単にできるかと言へば、少なくとも不可欠の要素として組み込むことは難しい。高神の体系は伝統的な仏教の理論体系を基にしているが、これは繁栄を不可欠の要素としていない。繁栄を不可欠の要素とするならば、ただ繁栄の概念をどこかに挿入するのではなく、高神の体系を一度解体し、目標や論理の順序などを最初から組み直す作業が必要になる。幸之助の理念が、その部分的な概念において高神と共通するものを持ちながら、独自の論理体系になつているのは、人間には繁栄が不可欠であると判断したからではないか。

この場合、高神の体系に繁栄の概念を付け足すだけではなぜ不十分だったのが問題となる。それは高神に限らず、仏教と繁栄の関係を

考える上で非常に重要な問題かも知れない。幸之助が独自の思想体系をつくろうとした理由の一つが、そこに存在すると思われる。

#### IV 「素直な心」の絶対矛盾——田辺による西田批判を手がかりに

西田幾多郎の弟子であつた田辺元は、西田の哲学を根本的に批判した。田辺は次のように論じている。

西田先生が自覚を以て意識の本質とせられ、而して自覚とは自己が自己の内に自己を限定することであるが、斯かる自覚の真義は自己を無にして自己を観るに至つて完成すると考え、自己を失うことが却つて真に自己を得る所以であり、無にして観る自己の本来に還ることが自己を愛する所以にして、自愛即ち自己の存在なることを説かれた深き教説は、先生の独自の体験を披瀝せられたものとして、私はただその比類稀なる高遠深邃の思想を仰ぐばかりである。併しながら哲学は果して斯かる宗教的自覚を体系化することが出来るものであらうか。<sup>44</sup>

田辺は、西田が「自己を無にして自己を観る」とか「自己を失うことが却つて真に自己を得る」と説いている箇所に注目した。これは「先生の独自の体験」であつて、「比類稀なる高遠深邃の思想」であり、「宗教的自覚」であるとしている。田辺は、こうした西田独特の

宗教体験を哲学化することは、不可能ではないかと批判したのであった。

ここで重要なのは、西田が『善の研究』で述べていた「純粹経験」が、ある種の宗教的な経験であり、西田独自の経験であるという指摘である。確かに西田は長きにわたって参禅しており、その経験からこのような哲学を見出したことは間違いない。

一方で西田は「純粹経験」について「初生児の意識の如き」<sup>46</sup>ものであると説明している。また、「凡ての精神現象がこの形に於て現はれるものであると信ずる」<sup>46</sup>と述べており、「動物の本能的動作にも必ずかくの如き精神状態が伴うて居る」<sup>47</sup>と主張している。西田の「純粹経験」は子供も含め、誰でも行なっていることであり、簡単に体験できることである。この点において、西田の主張と田辺の主張は真つ向から対立している。

これとよく似た問題は、友松圓諦や松下幸之助の「すなおな心」や「素直な心」についても指摘できる。例えば友松と高神が推進した真理運動では、次のように言われていた。

童子のまなこは真理をまっすぐに見つめてゐる。目と耳とから入る知識を正心正意にうけとろうとする。そしてかの善財童子のやうに、天地さへもうちふるふやうな発願をする。

童心に発願せよ、彼岸に発願せよ、かくして捨我精進の真理行があとづけゆく。<sup>48</sup>

子供の心は「すなほ」な心である。これは後年に至るまで友松が強調した主張であった。この意味では、「すなおな心」になることは決して難しいことではないと言える。

一方で、友松は「すなおな心」になるため、日々の修行や修養の大切さを説いていた。友松によれば、会社勤めの人の毎日の労働は「修養のタイム」<sup>49</sup>であった。また釈迦の「悟り」を「すなおな心」と表現することは多い。「すなおな心」は子供の心であるが、一生かけて修行しながら獲得するような高遠な境地でもある。

幸之助も「素直な心」について、次のように述べる。

こどもの心は素直である。だからわからぬことがあればすぐに問う。「なぜ、なぜ」と。

こどもは一生懸命である。熱心である。だから与えられた答を、自分でも懸命に考える。考えて納得がゆかなければ、どこまでも問いかえす。「なぜ、なぜ」と。

こどもの心には私心がない。とらわれがない。いいものはいいし、わるいものはわるい。だから思わぬものごとの本質をつくこととがしばしばある。こどもはこうして成長する。「なぜ」と問うて、それを教えられて、その教えを素直に自分で考えて、さらに「なぜ」と問いかえして、そして日一日と成長してゆくのである。<sup>51</sup>

幸之助は子供の心は「素直な心」であると説いている。また「素直な心」になるための修行の必要として、幸之助は次のように述べる。



きくところによると、碁を習っている人は、特別に先生につかなくとも、大体一万回くらい碁を打てば初段になれるということですが。素直な心の場合も、やはりそれと同じようなことがいえるのではないかと思います。素直な心になりたいということをまず念願し、それを朝夕心に思い浮かべるのです。つまり、素直な心は偉大な働きのある尊いものだから、自分はぜひ素直な心になりたい、というようなことを朝夕くり返し心に思い浮かべていくことが大切ではないかと思うのです。……そのように、たえず日常の行ないを反省すると同時に、とらわれない広い視野に立って物事を判断したかどうか、きのうの行ない、きょうのできごとに、とらわれない心が働いていたかどうかを心がけ、そのような心を少しでも養うよう精進をつむことが大切だと思います。そういう姿を一年、二年、三年とつづけて、約三十年を経たならば、やがては素直の初段ともいえるべき段階に到達することもできるのではないかと思うのです。

幸之助は、「素直な心」になろうと日々努力し、三〇年でようやく初段になれると主張している。「素直な心」は長年の修行の末に到達できる境地なのである。

真理運動やPHP運動において、「すなおな心」や「素直な心」は、子供の心であると同時に、何十年にもわたる修行を要するものとされている。この点は、西田の「純粹経験」について、「初生児の意識の

如き」ものと西田が主張したことと、西田による「比類稀なる高遠深邃」な境地だと田辺が主張したことの対立とよく似ている。

これらの主張は、「大人が童心にかえることは、かえって難しい」ということを意味しているのではない。それならば、子供のままでいて、成長しなければ良いということになってしまふ。ここで説かれていたことは、人間としての成長を否定する論理ではない。友松、高神、幸之助によれば、人間は、修行によって日々成長して行くべきであり、同時に子供のような素直な心にならなければならないというのである。

つまり、「すなおな心」や「素直な心」は、明白に矛盾した二つの内容を含んでいるのである。その矛盾は絶対的と言ってもよいくらい強いものである。まったく相容れない「子供」と、数十年にわたる「修養」とが混在している主張なのである。われわれはここに、まず絶対的な矛盾が内在していることをしっかりと確認しておかなければならない。

では、この主張は論理的に破綻しているのかと言えば、決してそうではない。論理の矛盾が論理の破綻につながるという発想は、西洋哲學的な論理の発想である。高神や幸之助が現代において取り戻すべきであると唱えたのは、西洋哲學のロジックではなく、日本の伝統的なものの考え方であった。それは論理の矛盾を矛盾のまま内包し、価値あるものと認める態度でもある。

例えば「白であると同時に黒である」という主張があったとしよう。それは、両者を足した灰色でも、白と黒のまだら模様や縞模様でもな